

目次

はじめに

漢文読み方の基礎

一 「送りがな」について	一五
1 「送りがな」とは	一六
2 「送りがな」のつけ方	一七
二 「返り点」について	二三
1 「返り点」とは	二三
2 「返り点」のつけ方	二四
①レ点と一・二点	
②レ点と一・二点の違い	
③たててん(豎点)をつける場合	
④上下・上中下・甲乙・甲乙丙丁・天地・天地人をつける場合	
3 返って読む場合	二六
(1) ヲ・ニ・トと読む場合	二九
(2) 再読文字の場合(未・将・且・当・応・須・宜・猶・盍)	三四

○注意すべき形……………	七
(イ)「常不……」と「不常……」、「必不……」と「不必……」……………	七
(ロ)「敢不……」と「不敢……」……………	七
「亦不……」と「不亦……」……………	九
「不唯……」……………	九
「非独……」……………	九
(イ)「未之見」「不之知」……………	一〇〇
二 使役の形……………	一〇一
1 「使」「令」「遣」「教」「俾」を用いる場合……………	一〇一
2 「命」「召」「勸」「諭」などを用いる場合……………	一〇一
3 前後の関係から使役に読む場合……………	一〇一
三 受身の形……………	一〇二
1 「被」「見」を用いる場合……………	一〇二
2 「為……所……」を用いる場合……………	一〇二
3 「於」「乎」「于」を用いる場合……………	一〇二
4 前後の関係から受身に読む場合……………	一〇二
四 疑問の形……………	一〇二

八	1 「誰」「孰」を用いる場合……………	一〇九
2 「何」「奚」「那」「寧」「安」「焉」などを用いる場合……………	一一〇	
3 「如何」「奈何」を用いる場合……………	一一三	
4 「何以」を用いる場合……………	一一四	
5 「何由」を用いる場合……………	一一五	
6 「何為」を用いる場合……………	一一六	
7 文末に「乎」「哉」「耶」「邪」「也」「歟」「与」を用いる場合……………	一一七	
五 反語の形……………	一二七	
1 「誰」「孰」を用いる場合……………	一二八	
2 「何」「奚」「那」「寧」「安」「焉」などを用いる場合……………	一二八	
3 「何以」を用いる場合……………	一二八	
4 「何為」を用いる場合……………	一二八	
5 「豈……哉」を用いる場合……………	一二八	
6 文末に「乎」「哉」「耶」「邪」「也」「歟」「与」を用いる場合……………	一二八	
7 「敢不……乎」を用いる場合……………	一二八	
六 仮定の形……………	一三三	

- 1 「若」「如」を用いる場合……………三四
- 2 「仮令」「縱令」「仮」「縱」を用いる場合……………三六
- 3 「苟」を用いる場合……………三七
- 4 「雖」を用いる場合……………三八
- 5 「微」を用いる場合……………三九

七 比較の形……………三九

- 1 「於」(于・乎)を用いる場合……………三九
- 2 「不如」「不若」「莫如」「莫若」を用いる場合……………四〇
- 3 「与」……………不如」「与」……………莫如」を用いる場合……………四一
- 4 「無(莫)……………焉」を用いる場合……………四二

○選択的な意を表わす場合……………四三

- 1 「寧」を用いる場合……………四三
- 2 「与」……………寧」を用いる場合……………四四
- 3 「孰若」「孰与」を用いる場合……………四四
- 4 「与」……………孰若(孰与)」を用いる場合……………四五

八 推量の形……………四五

- 1 「恐」「或」「蓋」を用いる場合……………四六
- 2 「庶幾」「庶乎」「庶」「幾」を用いる場合……………四六

九 抑揚の形……………四六

- 1 「況(矧)」「而況」を用いる場合……………四六
- 2 「且」……………況」「猶」……………況」を用いる場合……………四七

一〇 倒装の形……………四七

練習問題……………四七

解答……………四八

の場合である。

以下、後者に必要な「送りがな」・「返り点」のことから説明して行きたい。

1 「送りがな」とは

まず「送りがな」(送假名)であるが、それは漢文を国文に訳して読む場合の読み方を示すため、直接漢文につける仮名のことである。

たとえば、「花開。」という漢文は「花開く。」と読み、「富士山名山。」という漢文は「富士山は名山なり。」と読み、「城春草木深。」という漢文は「城春にして草木深し。」と読み、「池水甚清。」という漢文は「池水甚だ清し。」と読みが(漢文は文語)、その読み方を示すため

花開。

富士山 名山。

城春 草木深。

池水甚清。

のように、直接漢文につける仮名が「送りがな」である。

2 「送りがな」のつけ方

「送りがな」は以上の例文からもわかるように、必ず片假名を用い、しかもその漢字の右下に小さくつけるのがきまりであるが、それはまた、文語(歴史的仮名づかい)を用いるのがきまりである。

この文語というのは、文語に慣れない諸君にはなかなか苦勞と思われるが、それについては、漢文を読む場合に、出来るだけ声を出して読むことを勧めたい。声を出して読んでおれば、自然に口調として覚えるものがある。

なお、「送りがな」は国文に訳して読む場合の補って読む仮名の部分を全部つければよいが、それについては、さらに次のようなことを知っておくとよい。

(1) 動詞・形容詞・形容動詞については、活用の語尾(文語)だけをつける。
たとえば「動く」は「動^ク」、「登る」は「登^ル」、「清し」は「清^シ」、「美麗なり」は「美麗^{ナリ}」とつける類である。

したがって「驚く」が「驚かす」となり、「極む」が「極めて」となり、「始む」が「始めて」となり、「騒ぐ」が「騒がし」となるような場合は、もとの語の活用の語尾からつけて、

驚^{カス} 極^ム 始^ム 騒^{ガシ}

のようになる。

なお、特別な場合として、「雨」を「あめふる」、「指」を「ゆびさす」と読むような時は、「雨^{ツル}」「指^{サス}」のように、活用の語尾だけでなく、その補って読む仮名の部分を全部つける。